

# 翁

シテ 渡邊荀之助 (能)

面箱 清水 宗治  
三番叟 炭 光太郎  
千歳 藪 克徳

狂言後見 能村 祐丞  
荒井 亮吉

大鼓 飯嶋六之佐  
小鼓 住駒 俊介  
小鼓 住駒 充彦  
小鼓 河原 英照  
笛 室石 和夫

後見 佐野 由於  
佐野 玄宜

休憩 十五分

地謡 水口 純治 高橋 憲正  
谷 清士 高橋 右任  
酒井 章 渡邊 茂人  
中村 清 松本 博

# 鶴

## 亀

シテ 廣島 克栄  
亀原 一寿  
鶴 福岡甚三郎

ワキツレ 平木 豊男  
ワキツレ 渡貫 多聞

大鼓 田中 一義 太鼓 麦谷 暁夫  
小鼓 河原 清 笛 瀬賀 尚義

後見 島村 明宏  
福岡 聡子

間 吉川 真生

地謡 寺田 茂 佐野 弘宜  
岩井 嘉樹 佐野 由於  
山本 貢伸 高橋 憲正  
笠間 啓 田屋 邦夫

# 三本柱

(狂言)

果報者 能村 祐丞

太郎冠者 炭 哲男  
次郎冠者 中尾 史生  
三郎冠者 山田 讓二

後見 清水 宗治

# 葛

## 城

シテ 藪 俊彦 (能)

ワキ 北島 公之  
ワキツレ 平木 豊男

大鼓 飯嶋六之佐 太鼓 麦谷清一郎  
小鼓 住駒 幸英 笛 高島 敏彦

間 荒井 亮吉

後見 高橋 右任  
松田 若子

地謡 浅谷 之信 佐野 玄宜  
船本 嘉人 島村 明宏  
長野 裕 渡邊 茂人  
山崎 健 佐野 弘宜

## 能 翁 (おきな)

老体の神による祝福の歌舞で、古くは(父尉)を省略せず、(式三番)と呼びました。神聖な晴れの催しや正月に演じられます。幕が上がって、面箱持ち(狂言方)・翁(シテ方)・千歳(同)・三番叟(狂言方)、そして雛子方ほかの諸役が登場し、翁の前で面が箱から出されるのを待って着座します。笛や小鼓三丁の雛子とともに、翁は「とうどうたらり」と千代の幸せを祈る祝言を謡います。次に千歳が「鳴るは滝の水」を謡い舞って、千年の栄えをことほぎます。この間に翁は白式尉の面を掛け、神となつて三番叟に向き合い、そばに参ろうと上機嫌です。やがて正面を向いた翁は、袖を大きく広げて、天下泰平国土安穩を祈祷し、莊重な翁舞を舞います。面を外した翁(と千歳)が退場したあと、雛子に大鼓が加わって、喜びを逃すまいという三番叟による揉ノ段、黒式尉の面を掛けた三番叟と面箱持ちによる問答の後、鈴を受け取つた三番叟が鈴ノ段を舞つて終わります。

## 能 鶴 龜 (つるかめ)

官人(アイ)が玄宗皇帝の賢政を称え、月宮殿への行幸に列なるよう卿相雲客に触れ回ります。続いて皇帝(シテ)が大臣たち(ワキ・ワキツレ)を従えて登場し、初春の事始めとして不老門で日月の光をみそなわします。参内の官人はひきもきらずその数一億百余人とか。万戸の家々でも一斉に声があがり、国中が皇帝に拝礼する物音は天まで響いておびただしいことです。月宮殿の庭には金銀を敷き詰め、敷布は銀、七宝細工の柩や行柩、池の橋、池の水際には鶴龜が遊び、さながら蓬萊山のようにです。拝見する者一同、帝恩に感じ入ります。毎年の嘉例とて大臣の合図で鶴と龜(子方)に舞わせ、その長寿に寄せて皇帝の長命が言寿がれた後、皇帝自ら月の都に思いをめぐらして舞樂に加わり舞い奏でます。国土の繁栄長遠なれと祝い納めた皇帝はその名もめでたい長生殿に還御します。鶴龜の長寿にあやかる祝祷の芸系に連なり古色を残した現在最短路は金春系の作かとされます。

## 狂 言 三本柱 (さんぼんのはしら)

太郎・次郎・三郎の三人の冠者が、普請の成就した主人の言い付けで、柱にする材木を山へ取りに出かけます。三本の柱を三人して二本ずつ持ち帰れ、という指示の意味を太郎冠者が謎解きして、その様を謡い難してにぎやかに帰ります。迎えに出た主人は、冠者たちの知恵を喜び、難し物にも気をよくして、鯛の鮓と諸白の酒を振る舞います。まことにおめでたい、浮き浮きした作品ですが、冠者より先に謎が解けるか、観客も試されます。

## 能 葛 城 (かずらき)

羽黒山の山伏たち(ワキ・ワキツレ)が雪の葛城山に入り通い馴れた山路を踏み迷うところへ、柴取りの女(前シテ)が現れ谷間の庵に案内します。女は柴の束(しもと)を解き火に焚いて山伏たちをもてなします。しもと結う葛城山の古歌を引く風雅な女には無常の世を生きる嘆きがあるらしく、勤行を始めようとする山伏たちに加持祈祷して悩みを除いてほしいと頼みます。三熱五衰と言えげの苦しみです。いにしえ岩橋を架けなかつた咎めに葛葛で縛られた葛城の神が救いを求めて現れたのだと分かりました(中入)。山伏たちが勤行していると、美しい女体の神(後シテ)が出現して自身の姿を恥じます。女神の羞恥心こそが架橋の工事を遅滞させ役の行者の呪法で縛られた原因でした。葛城の高天の原は皓々と月が照らし一面の銀世界に映える中で、女神は天の岩戸の昔を思いながら神樂歌を奏し大和舞を舞って、さらに明るい朝が来ないうちにと、夜の岩戸へ入ります。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年二月三日(日)午後一時始

(能) 弓八幡 (狂言) 宝の槌 (能) 巴